

## 服飾造形における技術的研究（第2報）

—カクテル・スーツの製作—

山 本 高 美、山 本 政

### I. 緒 言

現代における科学の進歩は、社会の高度化を押し進め人間生活を大きく変えている。こうした生活様式の中でアパレル産業の発展も、また、被服生活に大きな変革をもたらしている現状である。そこで、服装と人間生活、服装と文化、服装の社会的役割、服装の機能などの視点から、現代の服装を観察すると、多様化している服装の中で、ある時は審美的に、ある時は装飾的にと調和を求めて自己表現しつつ、T・P・Oに応じた洋服の着装が見られる昨今である。殊に近年社交の場で華やかなイブニング・ドレスや、ロング・ドレスが多く見られるようになった。ところが、これらの服装は、交通の便を問わず着装したまま会場に臨まれる被服形態ではない。これに鑑み従前、合理形態のフォーマル・ドレス2服種3種類を、独自の方法で製作し、実際に長期間着用することで、様々な角度から検討してきた。その結果では形態面・機能面および着脱に便利な合理性を確認した。これを受けて、更に素材面から合理性を追求し、経済性を軸に考案したものである。製作に当たっては造形の技術的研究を目標に掲げた。

### II. 研究方法

簞笥に眠っていた衿長着をリフォームし、フォーマルドレスの製作を行う。

#### 1) 資 料

素材の衿長着の表地は小浜縮緬であり着尺を全部使用した。また裏地のうち、裾廻し（八掛）、衿先布、袖口布は錦紗縮緬でありこれらの布を使用した。なお表地は、前着用者の訪問着を色抜きし、新たに友禅染し長着に縫製して4～5年愛用した。その後再度色抜きをし現在の柄に染め、稽古用として常時着用したものである。そのため布地が薄くなり特に地紋の縹子織りの所が損耗している。

## 2) 布地の点検

布地の点検と言う意義が、“ほどく”という言葉に集約されているように思う。それは、和服をときながら裁断されたパーツと用尺をおおむね掴むことができるからである。一方、簞

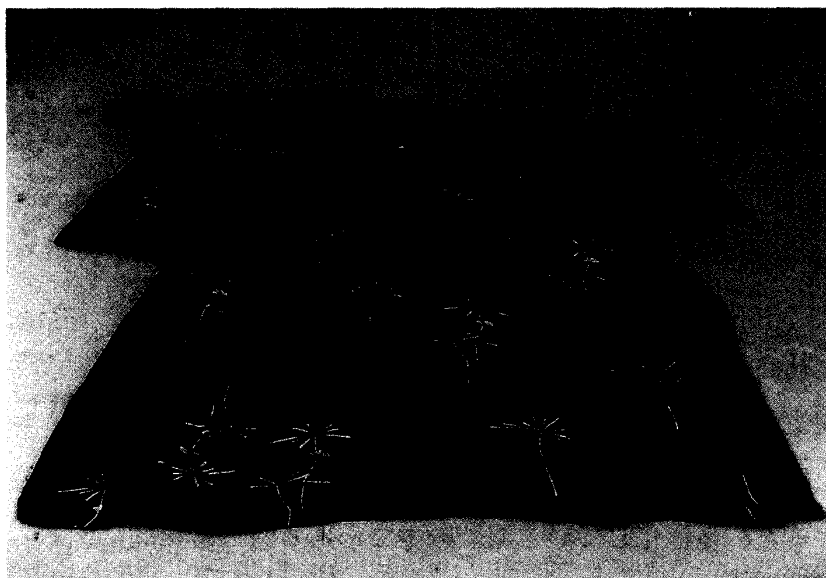


写真 1

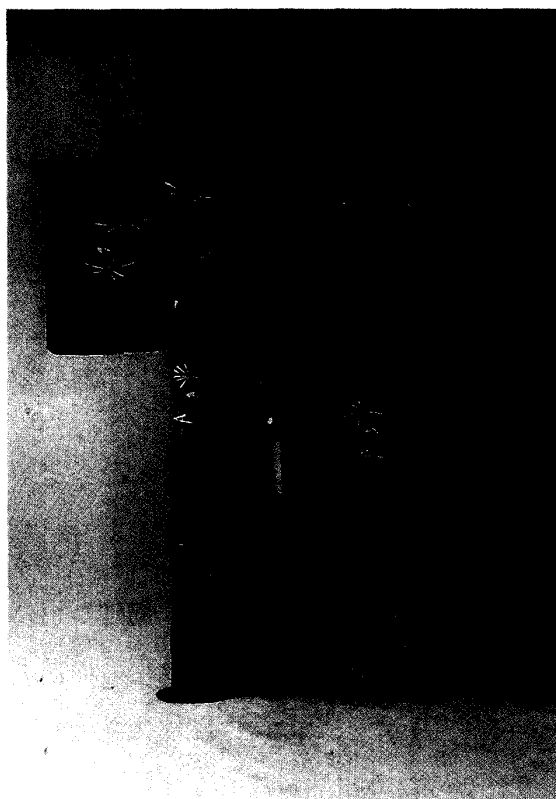


写真 2



写真 3

筭に長期仕舞い放しであった為の傷みや、色あせ部分なども確認できる。また“ほどく”作業の中で洋服のデザインも検討できる。など様々な事象について布地を点検しながら洋服の造形案が立てられる。

そのためには和服をほどく手順が必要であり、写真1のように先ず衿、次に袖をはずし中とじをほどいた状態で身頃を広げ、和服の紋様を検討する。洋服への配置転換を踏まえ限られた形と用尺の中で、構想中のデザインで可能かどうか予想を立てる。

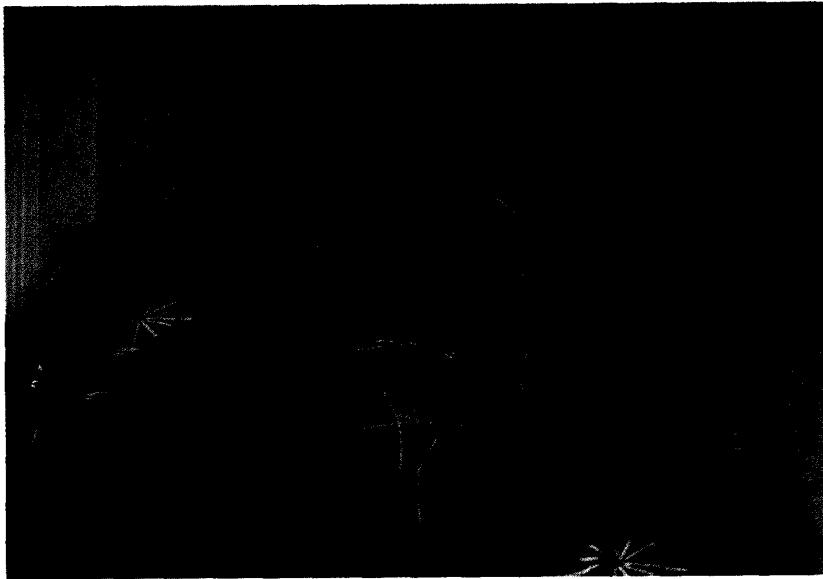
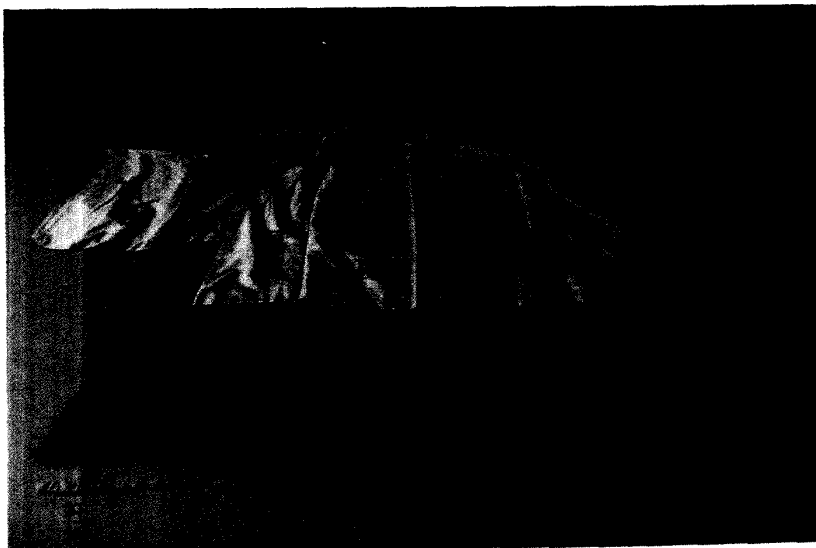


写真 4



裾

写真 5

## (1) 袷長着の形態と柄行

紋様は殆ど一方方向に近く、日本の柄を生かした大柄の飛び模様であり、写真2、3に示すような模様配置となっている。また写真4は繰り越しの縫い上げ位置に接ぎを入れ、身丈を長くしたことを示している。これは訪問着着用者と仕立て直し後着用者の、身長差による丈の調整であり、着用時おはしりのバランスを取るために、訪問着の袖丈をカットして接ぎを入れたものである。本来の長着の形態と異なり、丈や紋様が切断され支障を来す一因となっている。また裏は写真5に示す通りであるがブルーの錦紗縮緬の部分だけ使用した。

## (2) 寸法把握

表地の寸法は図1に示す通りであり、長着裁断時の形式は左右身頃で10枚、袖および衽が各2枚ずつ、衿1枚、掛け衿1枚の計16枚で構成されている。裏地の使用部分は図2に示すように裾廻し6枚と衿先・袖口裏各2枚の計10枚で構成されている。図1、2の寸法はアイロンで縫い目を伸ばした後測定した寸法である。

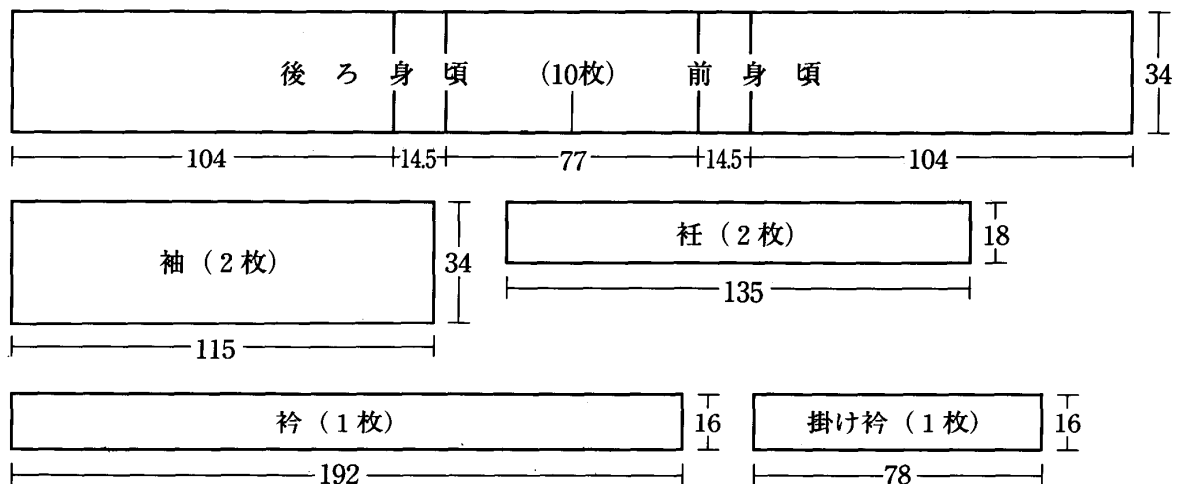


図1 袷長着の表身頃裁ち切り寸法

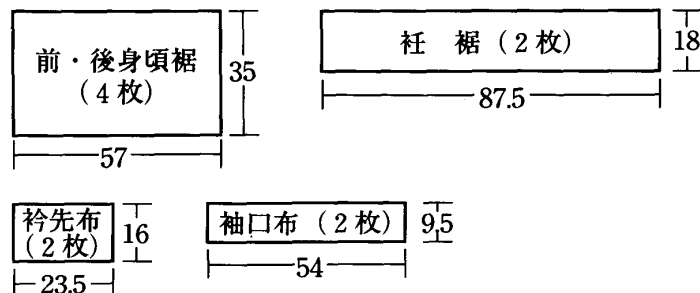


図2 袷長着の裾廻し布裁ち切り寸法



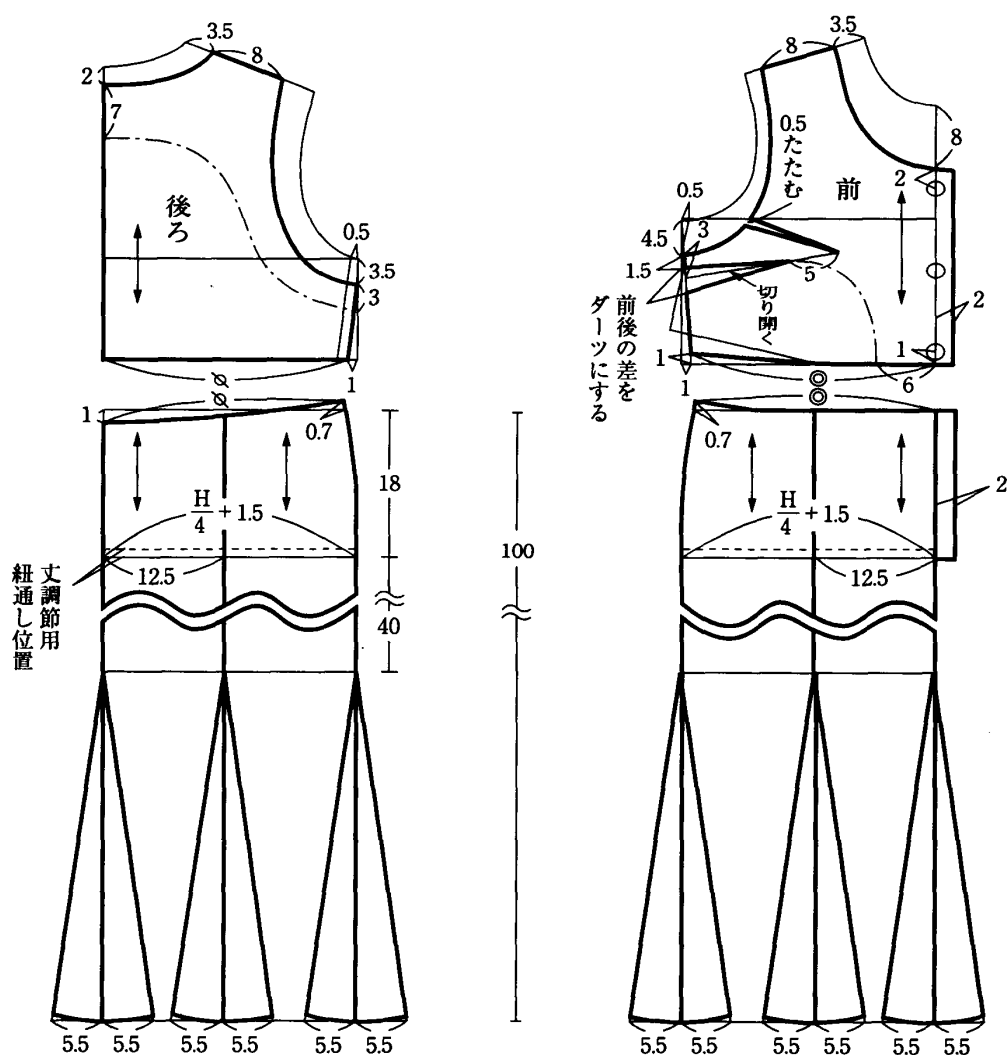


図3-2 製図 トップ付きスカート

トの良否が布地の使用効率に影響する。そこでアパレル方式によるマーキングが最善の方法と推察される。それにはマスターパターンが必要であり、シーチングによる仮縫製を行った。製図上の肩ダーツは裁断の際に処理をした。その方法はヨーク分を通常のように型紙をたたみ、後ろ身頃に伸びているダーツ分はデザイン線を利用して処理を行い、僧帽筋の上部から肩胛骨にかけての曲線に添わせるように縫製した。

## 5) 本製作

### (1) 裁断

マスターパターンによるマーキングを行い、裁断時のガイドラインを設定した。製作の布地は小浜縮緬であり平滑性、柔軟性に富み滑りやすく、ゆがみやすい。更に布地が損耗して

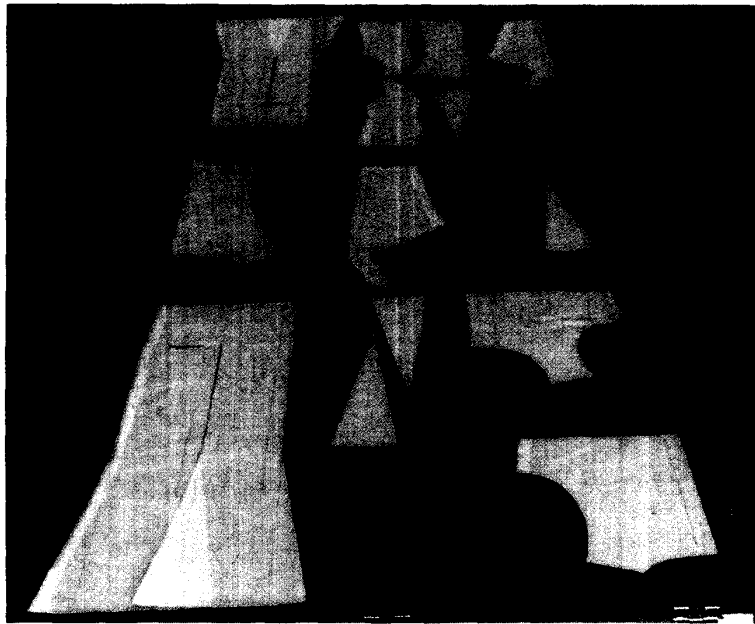


写真 6

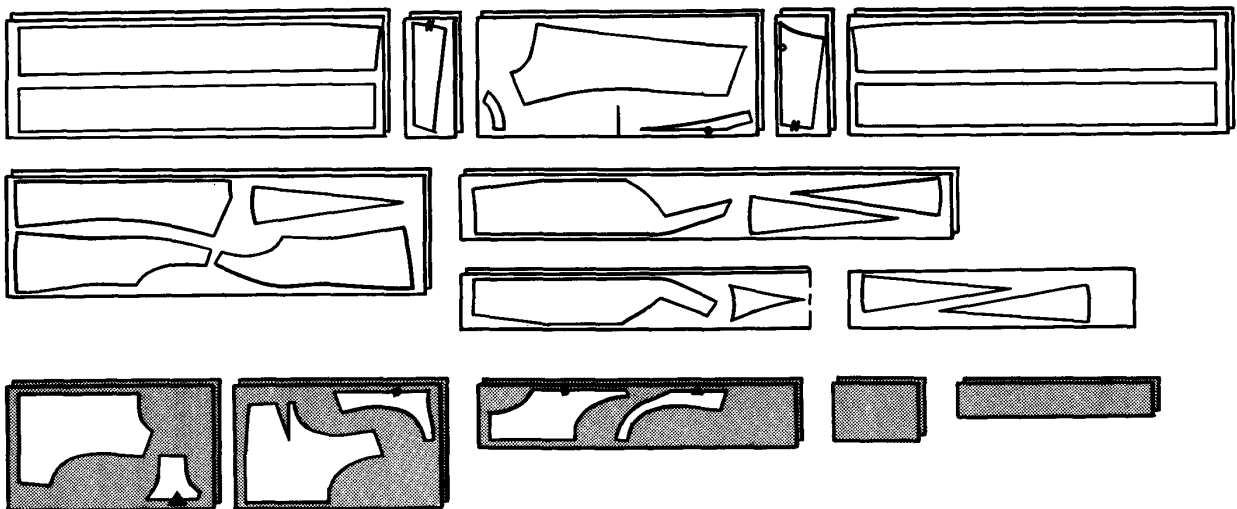


図4 裁断図

薄くなっている為、布目曲りしやすいなど、扱いにくい点が多い。そこでマーキングに先立ち限られた生地幅、用尺の中で、各パーツを合理的に配置するよう考慮した。それは写真6に示す通りである。実際に裁断するに当たってはマーメードラインのフレアー分および袖幅の不足分を、それぞれデザイン上のまちという形に置き換え、出来るだけロスのでないようコンパクトに配置した。布地幅不揃いの材料と言う点ではグレーディング技法を併用することで、図4に示すような裁断を行いイメージしたデザインを変えないで、マスターパター

ン上で修正して作業効率を上げた。

## (2) 仮縫い

風格のあるシルエットをかもし出す為に、仮縫い合わせをする前に接着芯を貼る。要領は、左右前身頃の中心側の布全面にアピコ200番、ヨーク全面にアピコ100番の接着芯を貼り、張りのあるシルエットになるよう、接着芯を使いわけて外観効果を引き出した。またジャケットの背、裾、袖山、袖下、袖口、見返しにもアピコ100番の接着芯を貼って、縫合しやすいように配慮した。接着の方法はバキュームプレス機を使用した。表地の風合いを損なわないように、いずれもテストを行い接着し、衣服成型上のメーカーアップ性を計った。試着し観察した結果、補正は少なかった。単にジャケット丈1cm詰める。ボタン位置をやや変更。スカートのトップで前身丈1cm、後ろ身丈2cm詰めたに過ぎない。

## (3) 本縫い

職業用ミシンを用いた。ミシン糸は絹50番、しつけ糸は和裁用綿じつけ、ミシン針は9番を使用した。ミシン縫合の際はシームパッカリングによるひずみのおきないようにハترون紙を敷いた。その他、製作工程において高度な技術を要した面<sup>オモ</sup>だった点は次の通りである。

- ・縫製面……ジャケットではヨークスリーブの角作り。玉縁ボタンホール。袖下のまちなど。トップ付きスカートではデザイン線を利用した紐通しの明き作り。着丈の調節を行うヒップライン位置の始末。ギャザーを寄せながらヘム始末を行うロックミシンの調整。ゴアードスカートに挟み込んだまちの縫製などである。
- ・アイロン・プレス面……前工程ではテープ貼り、芯据えなどの接着作業に注意した。中間工程では難度の高いくせとりであった。それは立体化する為の曲面形成の作業であり、追い込み、追い出し、いせ込み、のぼし等であるが、使用布地が損耗し腰がないために、殊更成型工程で技術を要した。

## III 考察と結果

### 1) 和服のリフォームについて

本製作は裕長着のリフォームであり、従来の研究テーマ（機能性）に経済性を加味し考案したデザインであるが次のような問題点を抱えていた。

- ・本製作の着尺は既に、16枚に切断された布であり、更に前着装者とのプロポーションの相互関連において、布地の扱いがどこまで柔軟に対応されるかが第一の問題である。
- ・仮縫製で製作したマスターパターンを、グレーディング併用することによって修正しながら、紋様を生かし、更に縫い代を最小限に押さえ、無駄なくレイアウトができるかどうか。



- ・裁断をアパレル方式で行うと、狭い並幅（34cm）と少ない用尺でも、創作製作が可能かどうか。
- ・マスターパターンによるマーキングは、グレーディングポイントの垂直および水平方向の移動量によって縫い代の節約ができるかどうか。などのような諸種の、問題点を考慮しながら製作してきたが、次ぎに述べるような結果となった。

#### （1）ジャケットについて

①前身頃のデザインをアシンメトリーにしたことで、体型カバーや紋様を生かす、用尺の節約になる、などの点を充した。②ジャケットに風格を持たせる為に見返しを広くしたが布地不足で、左右身頃共3枚の接ぎを入れることになった。しかし、その縫い目、縫い代が造形への補助効果として表現され重量感を与える結果となった。③袖幅が布不足で前・後袖にまたがるまちを入れた。そのデザインの工夫がプロポーションを安定させることになった。また本来、薄地の布で縫製するヨークスリーブでは、背幅線、胸幅線あたりのフォルムの崩れは隠せない。しかし袖に入れたまちの縫合部が形成効果を示し、前腋点、後腋点あたりの身頃形態は美的に保持される結果となった。

#### （2）スカートについて

①スカート幅も勿論であるが、まず丈の確保であった。通常長着の身頃は2枚で構成され、衿肩明きのわずかな切り込みを除いて、身頃1枚の長さが3mあまりと長い訳である。しかし本材料は端切れ4枚を含み10枚に分割されているため裁断に苦慮した。幸い図1に示すように、前後身頃で104cmの丈が4枚あり、8枚のゴアードスカート分にあてることができた。裾のフレア一分はまちを入れ裁ち出し分で賄うことで、シルエットを変えないで製作することが出来た。②前・後スカートのマスターパターンを並幅いっぱい（34cm）に2枚ずつ配置したが、着用者のサイズが13BRに近く、かつ基準寸法ではないため型紙の差込みは不可能である。そこで前述したようにフレア一分をまちに変えた訳であるが、その縫合部が腰の弱くなった小浜縮緬に、補助効果を与える結果となりマーメイド・ラインのゴア・フレア・スカートは優雅に描き出された。③仮縫製は行っているが、本製作時の微調整を考慮し、スカートのトップに裾廻し布を利用することで、できるだけ表地（小浜縮緬）の用尺を押さえた。つまりスカート全体を肩でつるデザインとなり、機能的で保型性上の美的保持につながるようになった。

以上のように和服から洋服を製作することは、その過程で難度の高い技術と知識が要求される。しかし、和服地が既に着用したものであり、布地全体が馴染み、つれの心配がない。殊に和服は仕立てる前に布地の整理（水通し・湯通し）がすでに行われているという利点もある。そ

こで、反物の耳を使用できるため、縫い代の節約につながり、そのことが、リフォームする時の最大の利点となる。古い着物が上質素材としてお洒落な洋服に作成されることを究明した。完成し着装した写真7、8、9は会場用カクテル・スーツとなり、写真10、11、12は交

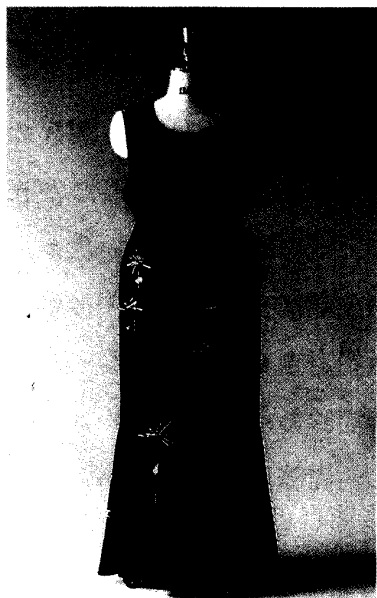


写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12

通に便利なツーピース・ドレスとなる。

#### IV. 要 約

限られた用尺で、身体フォルムとしての調和を念頭にデザインした。構想と技術面の合致は、容易でない面もあったが、形態面でも機能面においても合理的に表現できたと思う。それはジャケットの袖つけを明示しないようにしたことや、スカートが着脱せずにロング丈からノーマル丈に早変わりする便利な洋服に製作出来たことである。その他損耗した布地であるが、可縫製について吟味したことにより、縫い傷やラン、シームパッカリングなどの支障もなく製作でき、独自のデザインによる合理形態のドレスを製作することができた。このカクテル・スーツの製作は筆筒に眠っている素材の有効活用ともなった訳である。なお、今後実際に着用することで、形態安定性（伸縮・圧縮・しわ）や、取り扱い（洗濯・アイロン・保管）など多くの研究課題を示唆されているように思う。

本研究の製作物は平成8年5月、日本服飾学会において展示発表したものである。

山 本 高 美（本学助手）

山 本 政（本学教授）